

繪本三國妖婦傳

下編

四

13

2892

14



門へ 13
2892
巻 14

繪本三國妖婦傳下編卷之四

目録

三浦上総介大將宣下此圖
三浦上総介又及に武意城候る圖
大内の庭上に大城集り抗狩酒練の圖

三浦上総介大將宣下此圖

三浦上総介又及に武意城候る圖

大内の庭上に大城集り抗狩酒練の圖

三國妖婦傳下編目録

昭和九年
七月三日
東京

三浦上総支介那須野へ進軍の圖

兩介那須野の原狐狩并奉親降雨秘法を以て

那須野に陣取の圖

三浦上総支介九尾の狐退治の圖

魚瓶毒石と変じる圖

繪本三國妖婦傳下編卷之四

於大内狐狩誓古大追物の権奥并三浦上総雨外那須野發向

相も那須八郎順内之妖怪神鏡の徳よりして落りけり

迎國を隣定て安堵の思ひを以て八郎此旨關白殿へ

使廳へ呈書おし朝廷の天威おしりて順内靜燈仕まは

勢をとりあはるるがごとく此後又災害おはらぬと

をりしけりしりて此勢下よりさし沙汰止り又八郎と系

して神鏡を返納申しりて後より保安に奉事奉正月廿八日

當今名羽院いまは此壯事にし海也ともいふに

中へ此位を譲りておしりた子孫仁親五郎即ち



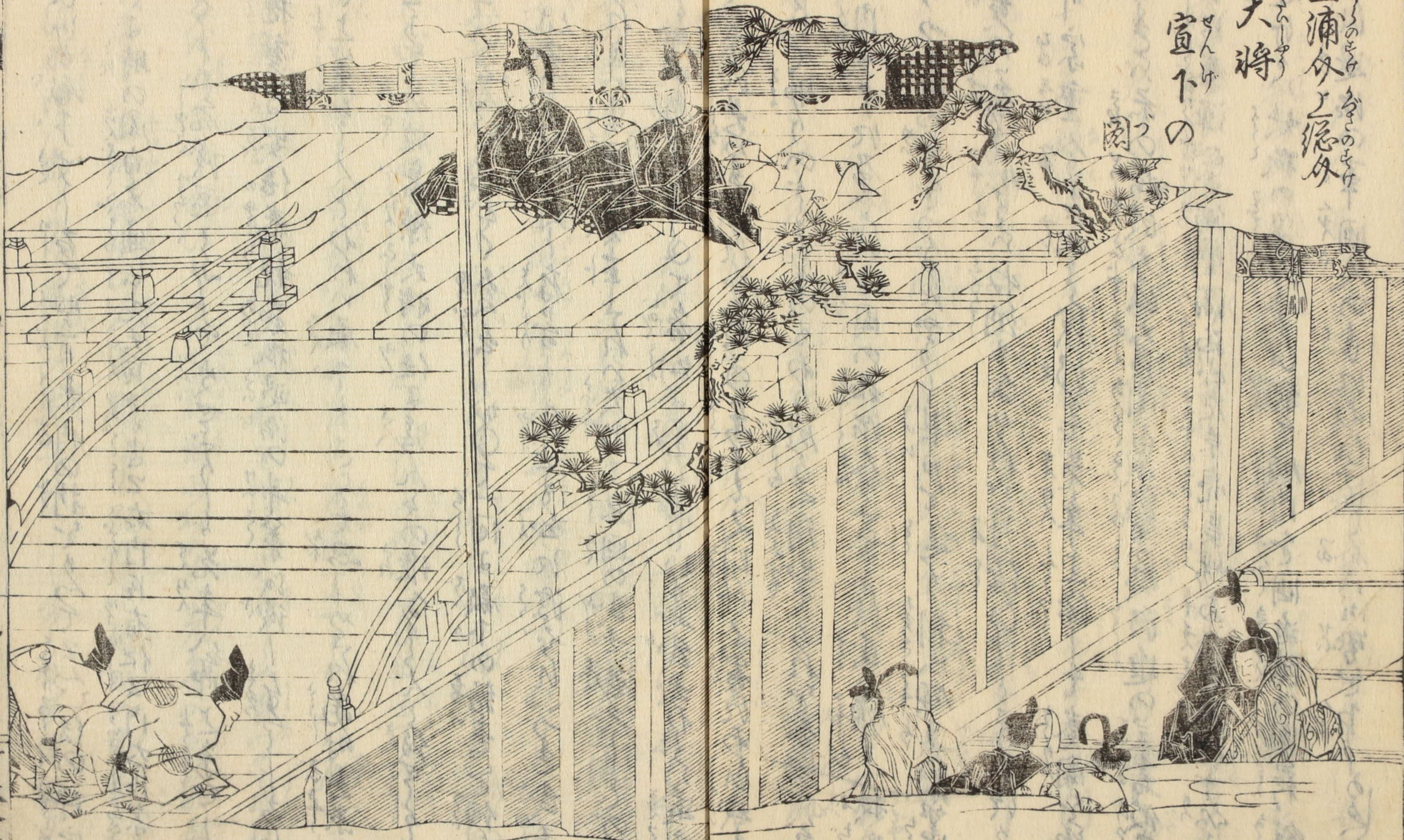
元わつて天治元甲辰より崇徳院と稱し、その足あり清和と
 大納言公實の息女名と璋子、後待賢門院と稱し、その
 日月の如くうらやまを際行、約日中く光陰矢たりも、その
 天治より大治、天業、長業の年号、改元して保延、丁巳年に
 中、十三年、那須八郎、頼内、静養、なり、その高年に、むけて
 那須、おの、重信、む、白面、金毛、九尾の悪狐、昼夜形をわづら
 害、成、あり、おびに、頼内の民、百姓、父母、妻子、兄弟、眷族を、殺
 され、位、あり、おぼ、ち、ま、に、ち、て、衣、之、奪、と、い、も、戸、ご、他、の
 流、來、は、り、を、わ、ら、り、て、農、業、を、お、し、も、お、し、ま、れ、バ、結、民、似、ま、お
 ろ、い、困、窮、を、終、小、終、り、其、之、隣、國、他、の、もの、性、業、を、する、もの
 へ、く、さ、ら、は、失、は、れ、を、恐、る、事、も、又、何、く、害、に、お、い、或、も
 か、り、て、脚、り、の、ご、ご、もの、も、わ、り、成、る、之、辨、出、て、お、れ、を、お、げ、八、郎
 が、頼、内、を、中、に、及、ぶ、に、迫、國、の、邪、説、大、く、お、し、り、民、ハ、頼、内、之、技、助
 を、お、し、り、て、お、し、り、を、つ、ま、り、や、り、其、日、を、送、り、利、ハ、頼、内、の、中、
 も、害、成、り、お、し、り、に、お、し、り、お、し、り、お、し、り、お、し、り、お、し、り、
 八、郎、宗、重、今、と、止、ま、り、お、し、り、お、し、り、お、し、り、お、し、り、
 て、お、し、り、お、し、り、の、指、改、た、お、し、り、大、臣、園、白、忠、實、公、ハ、清、進、の、三、書、信、家
 の、長、臣、泰、澤、三、少、弼、量、滿、西、山、大、亮、長、暢、お、し、り、人、を、お、し、り、
 中、述、け、り、ハ、女、概、の、災、あり、お、し、り、お、し、り、頼、内、を、國、邊、隣、の、國、形、斜
 あり、お、し、り、退、治、の、事、國、人、の、お、し、り、お、し、り、今、ハ、お、し、り、

三國大書傳下編卷之四

二

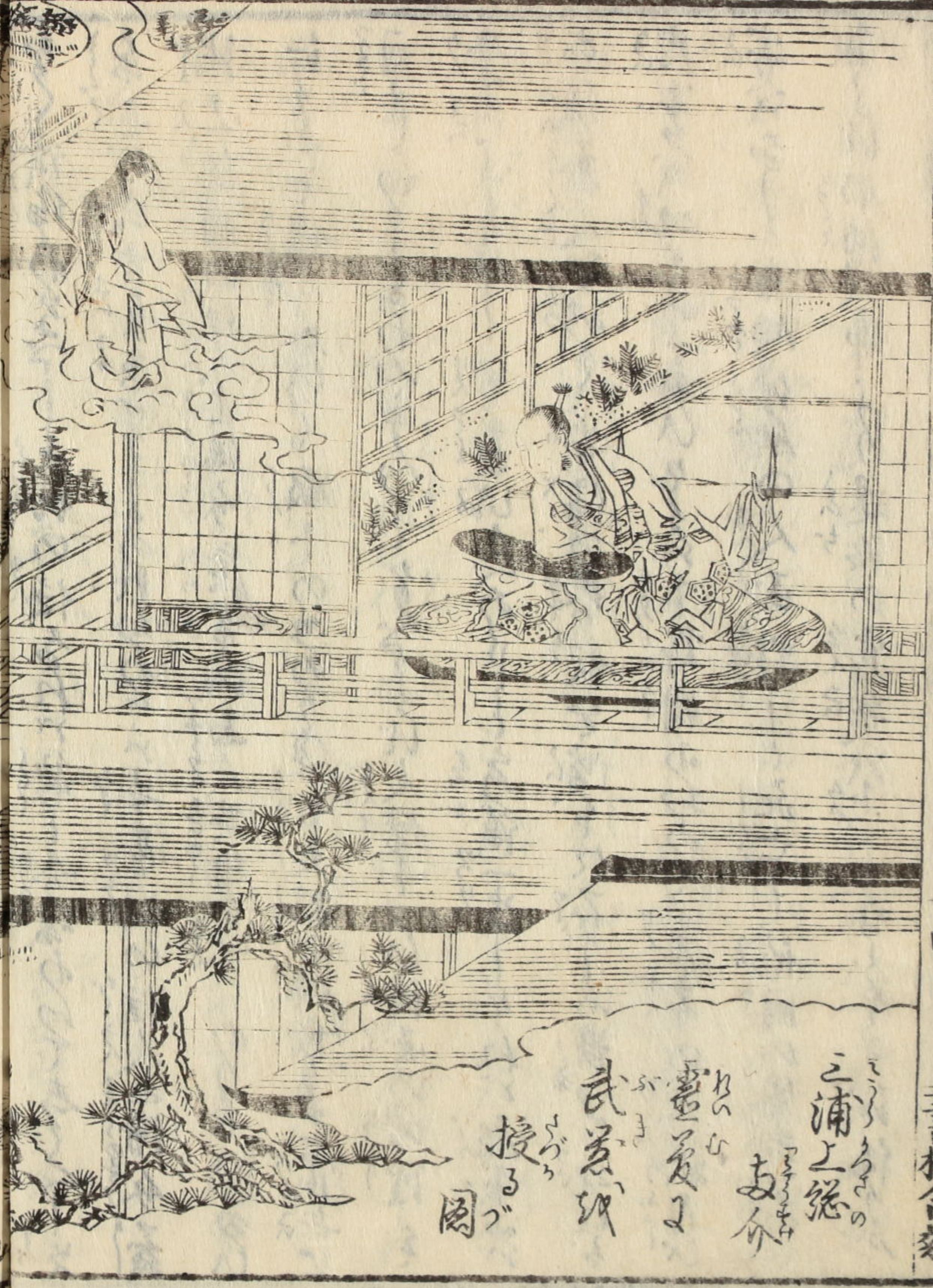
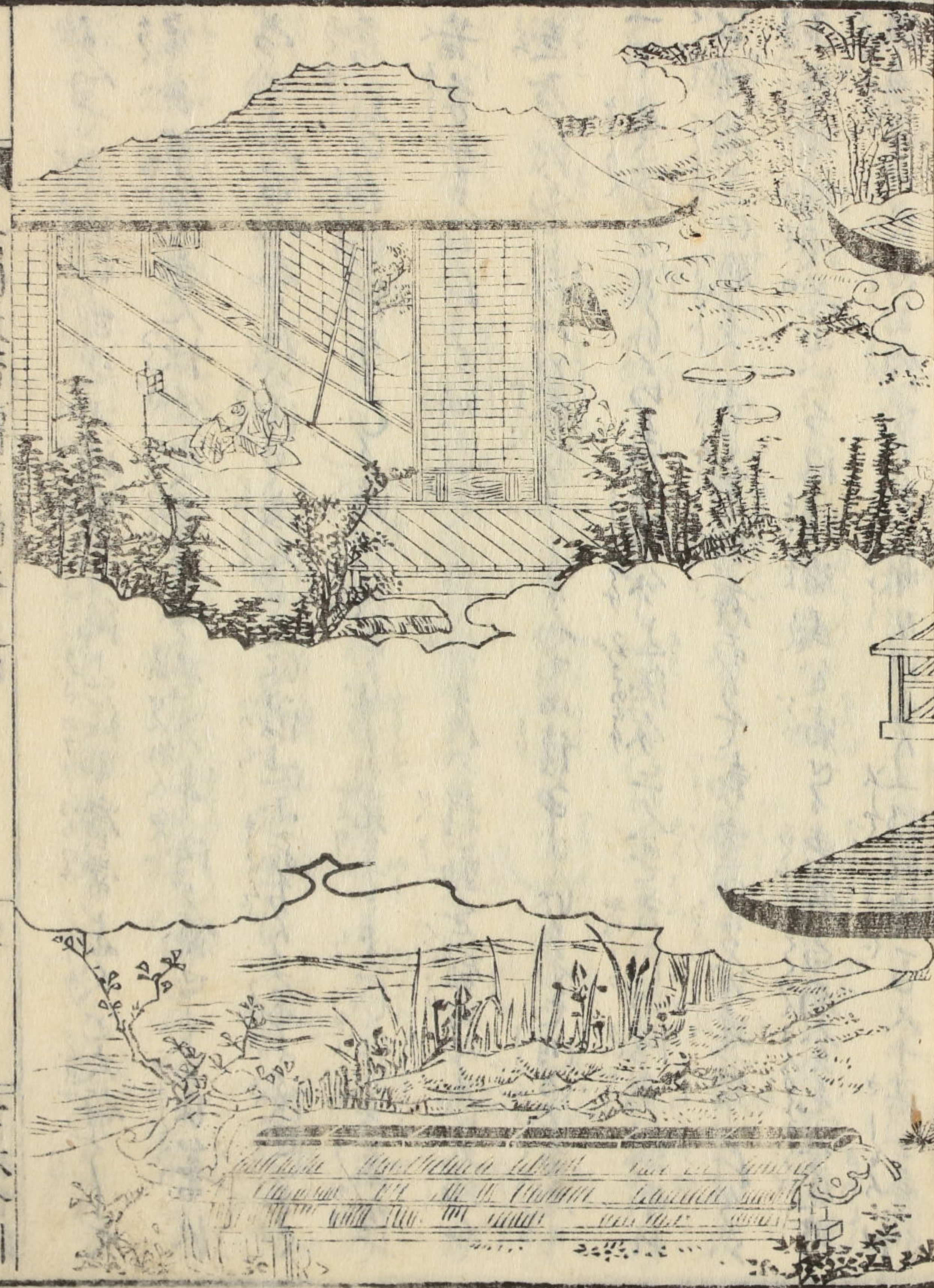
三言木之五

三浦外と總外
大将
宣下の
園づの



願ひける殿下うらにありて翌日あつち糸内いとちの折まをりてく一統いつしやうの評定ひやうじやう
 ありしは時の國くに白忠はくしゆ通とほはた大臣だいじん家忠けあちゆ右内みぎうち右みぎ仁に云い内うち大臣だいじん家忠けあちゆ
 云い以もくくのく危あや誠まこと臣しんといてく変かせるりは先せん年ねん八はち節せつ上じやう系けいせし一いつ
 其その播は磨ま書しよ安あ倍べい恭きやう親しん惡あく机き退たい治ぢのの斗と策さく以も誠まこと一いつといてくあれ
 今いま上じやう策さくなんといわれい殿だん下かもこここをし思おもへしたれ高たか射しや立た系けいの
 武ぶ士し少せうてい英えい雄ゆう豪ごう傑けつ大だい將しやうのの位ゐはた人ひと多おほのの誰たれあらんと強きやうせしるに
 満まん座ざののといつたやとくく安あんんかかのの一いつ回かいはは殿だん下かのの勢せいをを伺かひ
 誰たれ々々けけ安あんんといてくなんといてく安あんんかかのの一いつ回かいはは殿だん下かのの勢せいをを伺かひ
 云いれば且また東とう國こくのの安あ事じといれば大だい將しやうもも東とう國こくのの武ぶ士し勢せいといてく
 云いれば且また東とう國こくのの安あ事じといれば大だい將しやうもも東とう國こくのの武ぶ士し勢せいといてく
 大だい切せつのの任にんといてく能よくくく味あじわいてく去さるるべし一いつ
 赤あか玉たまのの武ぶ士しをを系けいせしるるべしののににあらわらてく安あ房ふさ國こくのの任にん三さん浦うら女によ義ぎ
 池いけ上のう總そう國こくのの任にん上のう總そう女によ廣ひろ常じやうのの女によ英えい雄ゆうのの位ゐはた人ひと多おほのの誰たれあらんと強きやうせしるるべし
 けけふふとと諸しよ々々かかのの殿だん下かのの勢せいをを伺かひといてくく官くわん兵へいを
 司ししるももわわややままつつといてく去さるるべし人ひと備びへい彼か玉たまのの地ち理りを
 業わざ内うちといてく安あ倍べい恭きやう親しんのの勢せいをを伺かひといてくく殿だん下かのの勢せいをを伺かひ
 六む位り孫そん人にんをを以もつつ安あ倍べい恭きやう親しんのの勢せいをを伺かひといてくく殿だん下かのの勢せいをを伺かひ
 内うちまま氏し以もつつのの勢せいをを伺かひといてくく殿だん下かのの勢せいをを伺かひ
 害がい誠まことをを一いつ自みづか領りやう地ち所じよのの人ひと民たみ勝かつつ死し亡じやう一いつ被ひ國こくのの困くわん窮きやう大だいに
 あらははびび形かたち八はち節せつといてく退たい治ぢのの官くわん兵へい城じやう下かのの勢せいをを伺かひといてくく殿だん下かのの勢せいをを伺かひ

三國大將傳下編卷之四

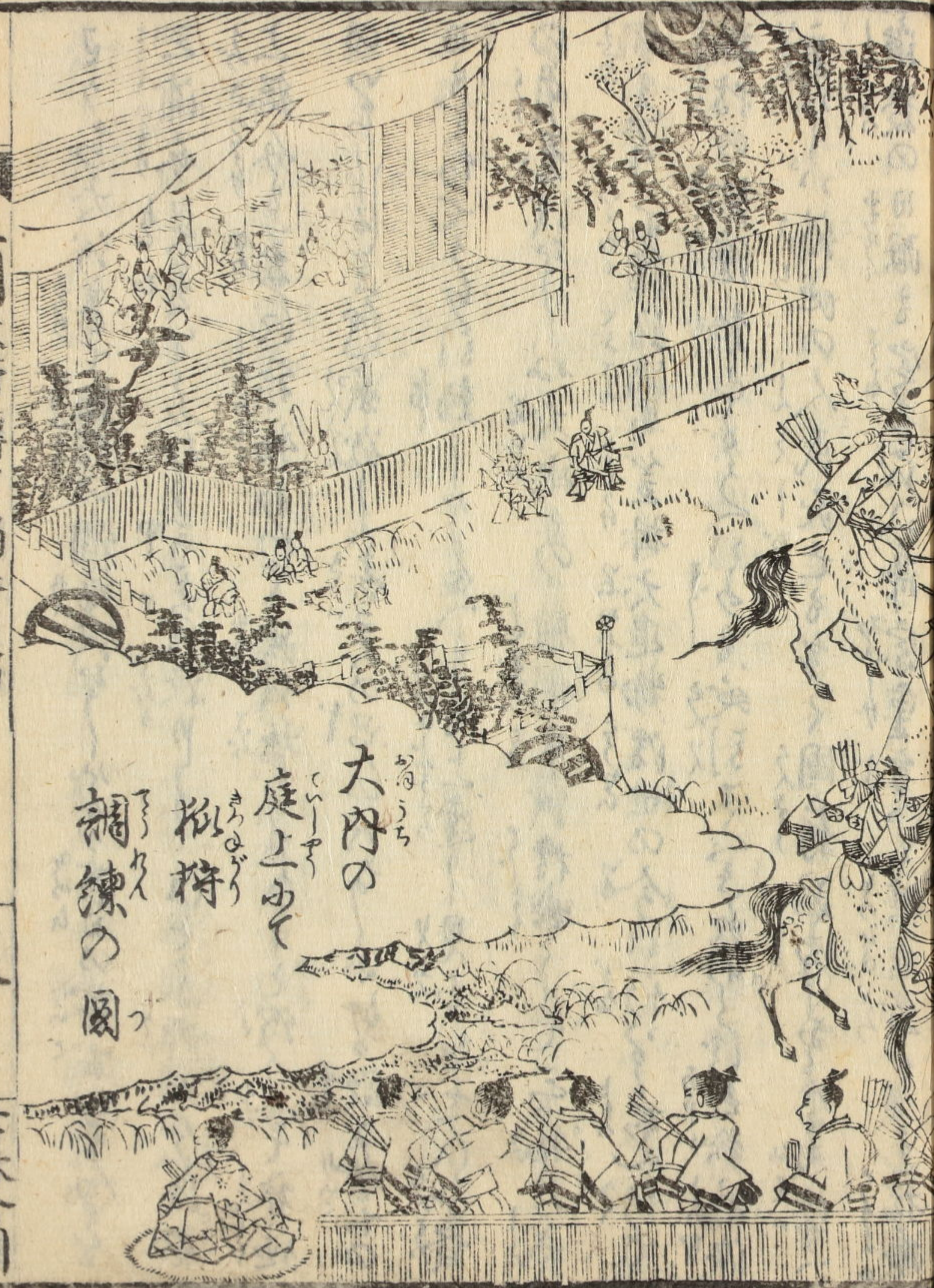


之浦上総
 友介
 武蔵
 授る
 図

一、つて東國の武士三浦少義純上徳助常武人を大将として
 官兵を命じて人徳依安定せり是元年汝が候也一良策に
 ありてふ所をあらば汝も其人ともに信地小ありり兼て候也と
 熟識の形依代をむ法代修を色一先年と遠い海今八年をて
 若翁をりべんも國郡人民の爲るれば移勤を励まてび大功を
 立るる所とあれは素親うとまては信守一けふも河の宮白鹿下
 一、つて養子をとけり是三浦女上徳女二人を大内の際にめされ
 公卿殿上の職事堂上より列所ありて勅宣の令公達せしむる公
 下野國形源井ふかられ信守政を害せり悪敵白面金毛九尾乃
 根退治の大將は信守と進部力あり一むに詰る又十騎士を列
 率悪友兵七ふり百人で授けらるる其勢一万又千餘人其
 源下より衆武功をあらり悪敵を滅一人民の害のたれを根
 滅体下へ順に源進の額容易あらる極概中へ人教致おそ
 きに虎豹も及ぶ如小わ〜び〜び〜び〜び〜び〜び退治の
 替古綱練の〜あり〜〜の宣言之其人畏てを系多る
 武士の中中て大將の信守ありは是れ家の面目軍加
 小ありりては信守一退出されは素親を正色改て此後形外
 下向の宣言と遠を〜是又長て退出しそ後三浦上徳
 女女園白鹿下の彼に知り本懐た衛つ依先障あつて候也
 替古を〜は〜場亦は何色の地よ定先あり人をも何い〜

殿下の内下知して大内の方庭少ねて大河多々み物
 たる是頃りして士卒引率細練のう見分せりけ敷向
 づるの命せしきりり切て三浦と根あめおぼし
 の根持彼ハ神通われが武備のよ代ひて得る人率神カ乃
 加護はわるとん功をまんと叶ふべしと三浦外は乃信
 務訪大内神を待ねし此度勅命を奉り形治世の無敵退
 治神カに加護せられまると行懸し上徳女も高良の神カ
 をうけたりけるが神玉の誠を感念細文よりわが神カ之浦外
 考及はるがりけるは汝け度於源其の無敵退治とぞ勅命
 代るがり神カの推護は神カも志切なりけりて弓矢は
 扱くこれをりて退治とぞと源訪大内神より賜ふと見え

さめ紀よりて見れば白木の弓は響の羽乃征矢二節を流り
 三浦外感涙を流し一物もあふ身は泣けり矢はてり
 しては明神は神カ大内神カありと語いひしと
 源は上徳女も同じおぼし又三浦外は高良明神カ
 受の神カありて大内神カありあは是めて無敵とされ
 高良神カ神カをさると高良を思ふ高良はさめりり不
 流りりと記より見れば高良小橋けりし一途を神カ小
 うけてあり身は泣けりてかの途をわけては感念をわたり
 よろこびるがれてあ人大内の勢古場は出てあ百人の士卒を



大内の
庭上
桐
調練の園



日うち大軍集て楯持の稠集なりける其日の營をめぐりて
 三浦舟又後をふりり弓矢代換りしむはそふたりりれを
 上総舟も着に非物ありて流矢扱ひまひりとけり會て非徳
 のりしはるる代感然し喜果の思ひ代ありふける既二營古の
 日もちてうけ討難しるる也(と首上達し見分ををいを愛
 の用意なりぬ大逆の射術是代槍擧ぐて二物乃式
 定まり西智流瀆馬笠掛大逆物後世の今に行する也初て
 楯持の稠集熱くもろくはあり延引をきれわくは悪敵退治
 進發の日限も定まり八帛宗重方ても其旨達を(と播磨
 守恭親の三百人を候一日之(と打まけるも翌日之浦舟義池上総
 舟廣常騎馬八十騎の士卒列卒七子六百餘人於合を方又千
 余人を引具し(と鎧鎧翻轉と風よひりり刀槍燐耀と日に輝し
 隊伍整くとわたり代々つて武威を示し下路の由はすむ
 ると(と命をきくにこそとくはける洛中洛外に及は道筋の貴
 族群集して感せぬものちありりり(と園八別は宣下ありと
 数万の列卒出さしめ給ふ

西女那須野の原楯持恭親降雨の法を以て

時二保延三丁巳年九月播磨守安倍恭親下野園於頂のつと到
 着し(と順々那須八帛宗重小島西(と案内をきめて修法の場を

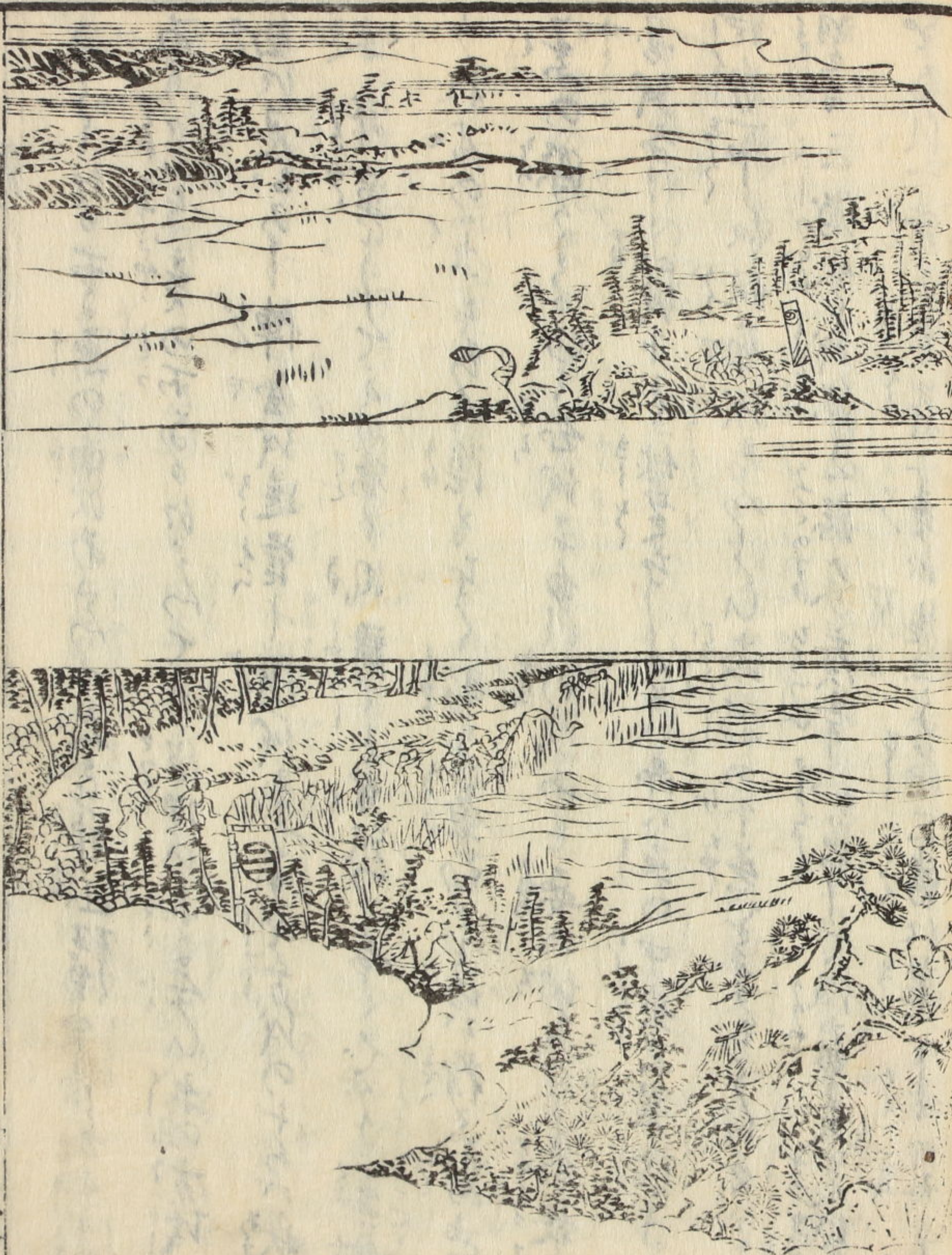
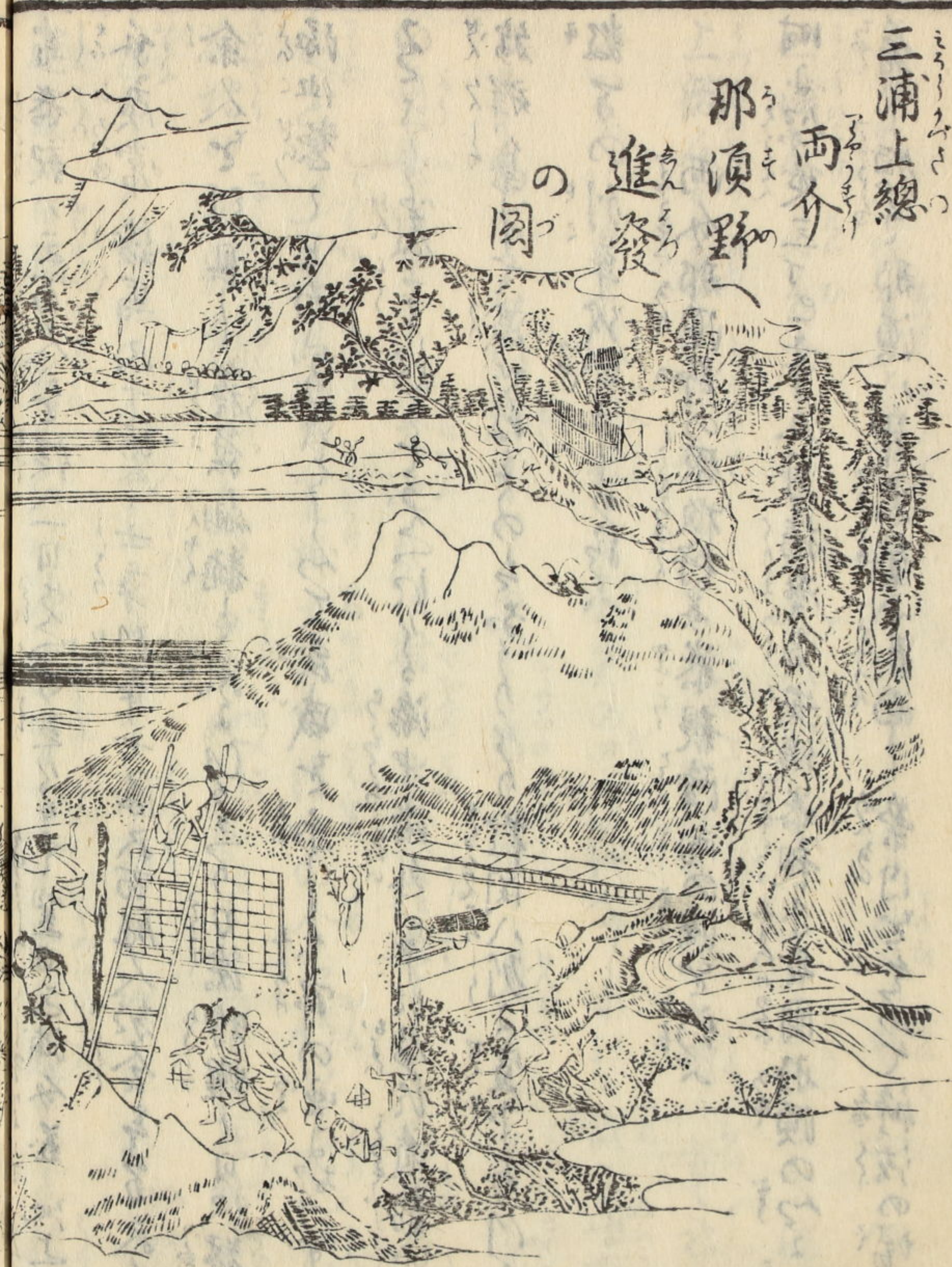
三浦上總

兩介

那須野

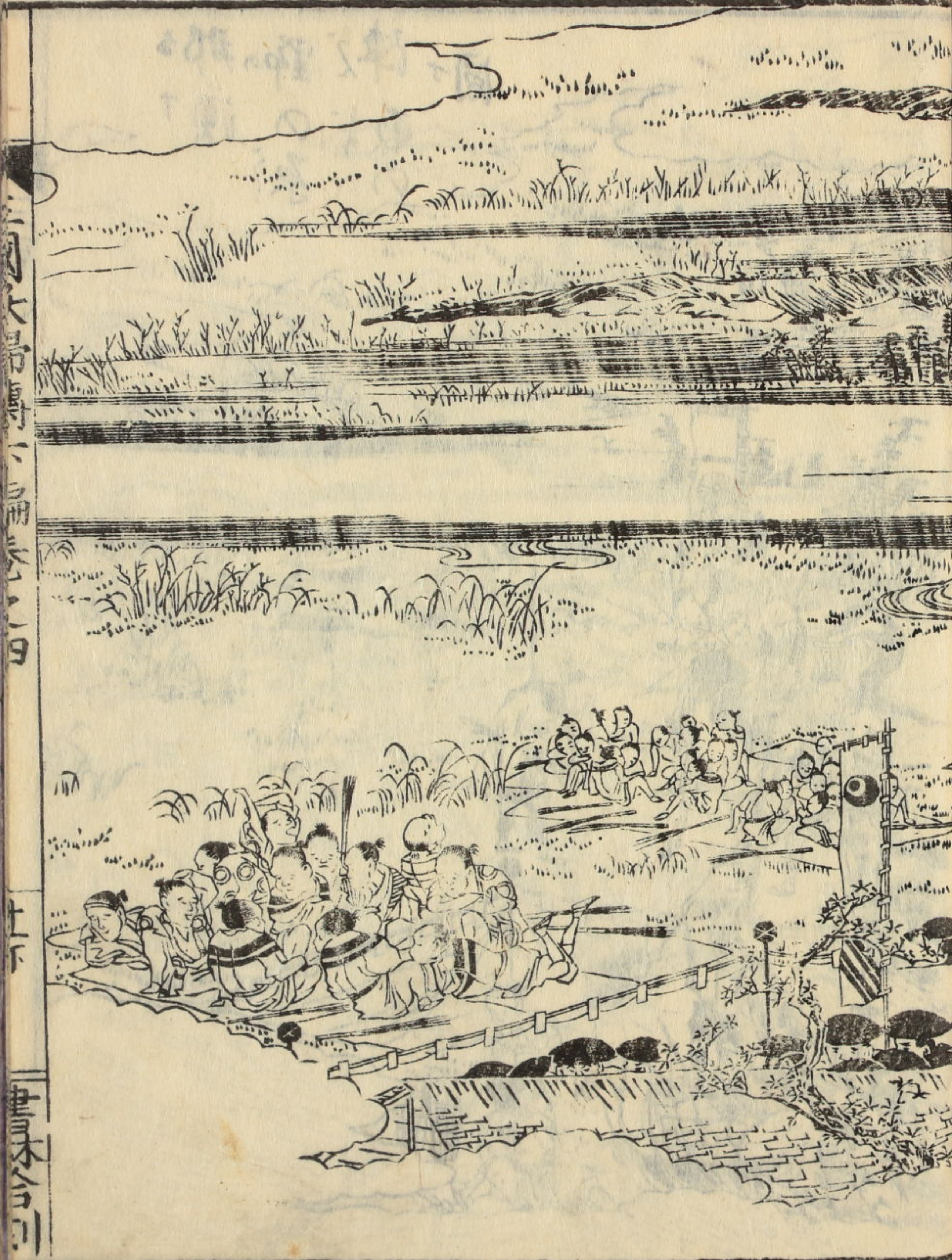
進發

の圖



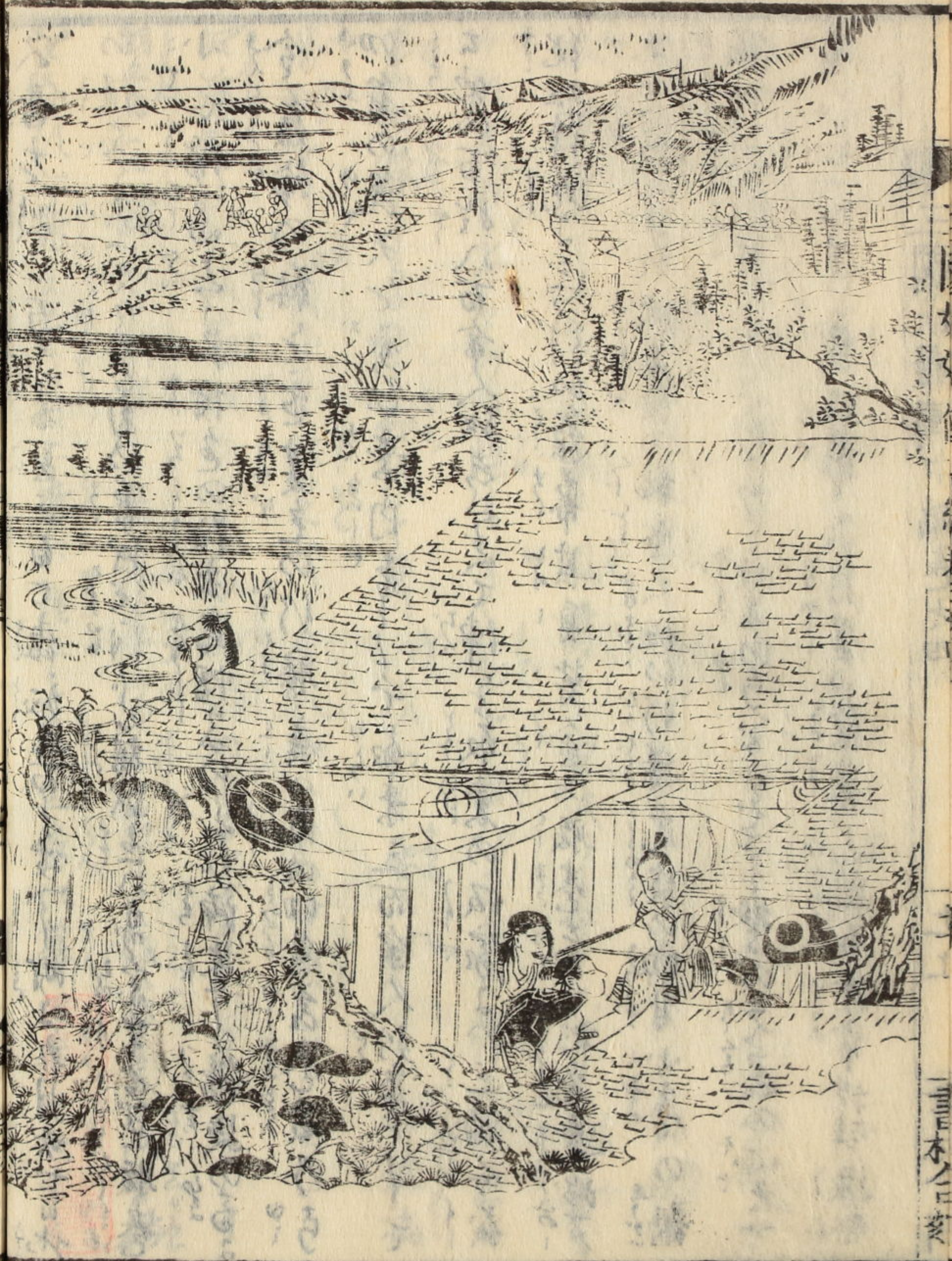
あつとけり西原の南にあつて之を神山（山）と云ふなり
 あり是れ西原の下あたりにてそそ峰頂の小き今い糸の方取正
 西にふかろ陣屋以遠宮一権威りよ多々宮方代のとらば秋の
 末寂寥として之の處に風蕭々として立つてあつてさうり
 うれよの葉をちり陰もなく眼を慰むるその八折ふあまる
 葉の際くさるのこを以てかたけいひゆを要の地ありと兼親指
 湯原をいふ以下と休是なり八折八原の中央三里にうさり
 田舎に飯屋ありとありあけの下をさうりけるなり
 翌日二浦へ我徒と流女彦常らて飯屋へ入る勢揃
 とあり一書は赤巻二書は地二子離三書は幕屋集に天千尺

又書古敏二百六書見二百七書迄二百八十一冊九月廿七日北
 の飯屋より一文堂に菊の幕以法にト鶴代立八折原守忌世服巻
 小は掃嵩より大折色の袴衣烏帽子のつに漆巻一鶴代はる
 合は後輪の結と並其色の江藤巻の皮の切竹巻巻を乃弓
 切符の篋矢とあり案内をさうりて赤巻三百余人列隊して
 各地の百姓八百余人代をさうりて陣を取東の飯家より二浦分義
 純姓九三三つ引の籠幕其身著人重の服巻をわすれ後連海戸
 色の道しきに決意地の結並大蛇の江藤虎皮の切竹小房の結
 飯指大の陣よりさうりて白木の弓とさうりて竹のえん心の証をさ
 ぬいさうりて西の飯家より月星の籠幕上総女彦常は後輪巻



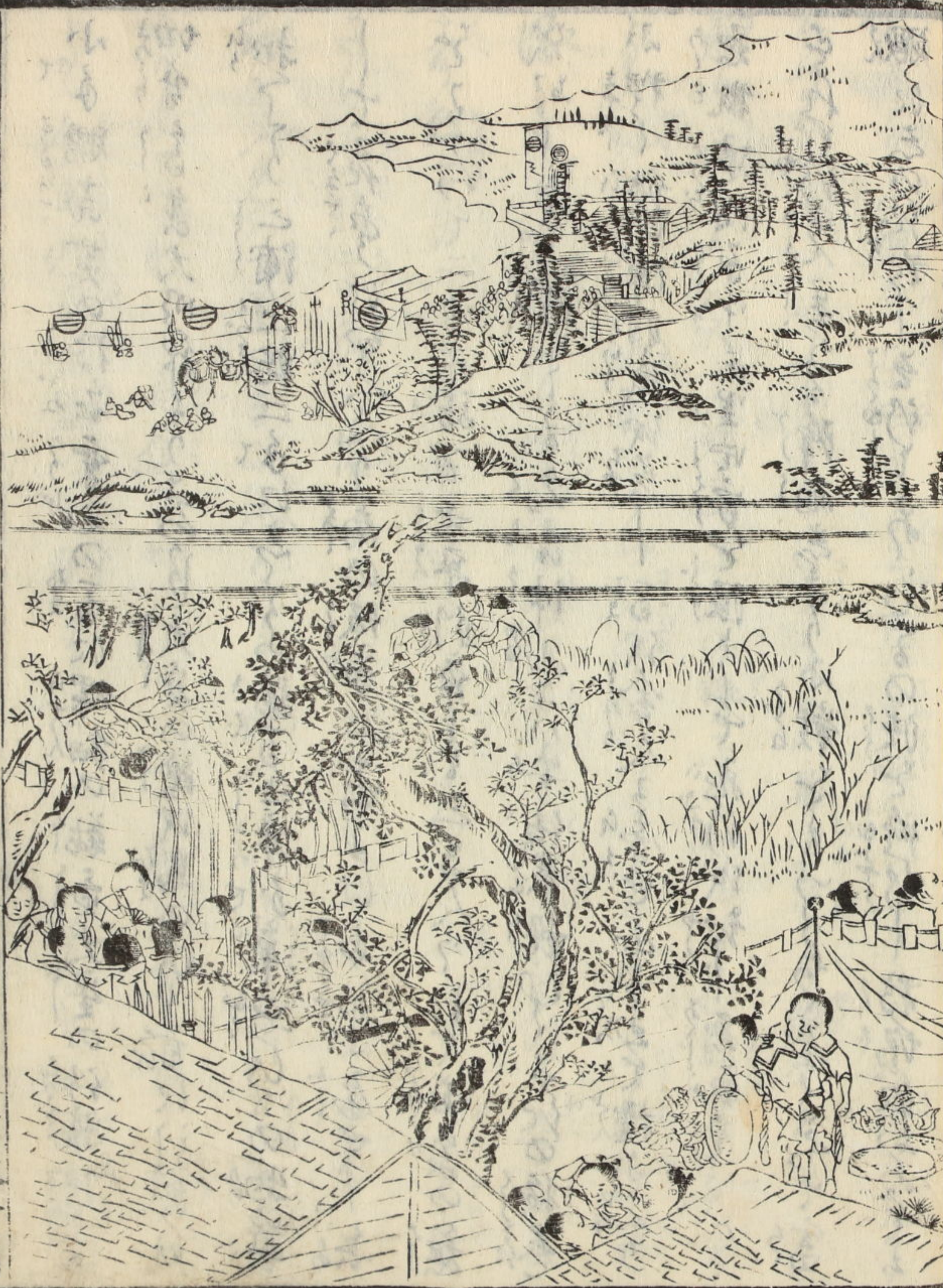
上
下

書本合刊

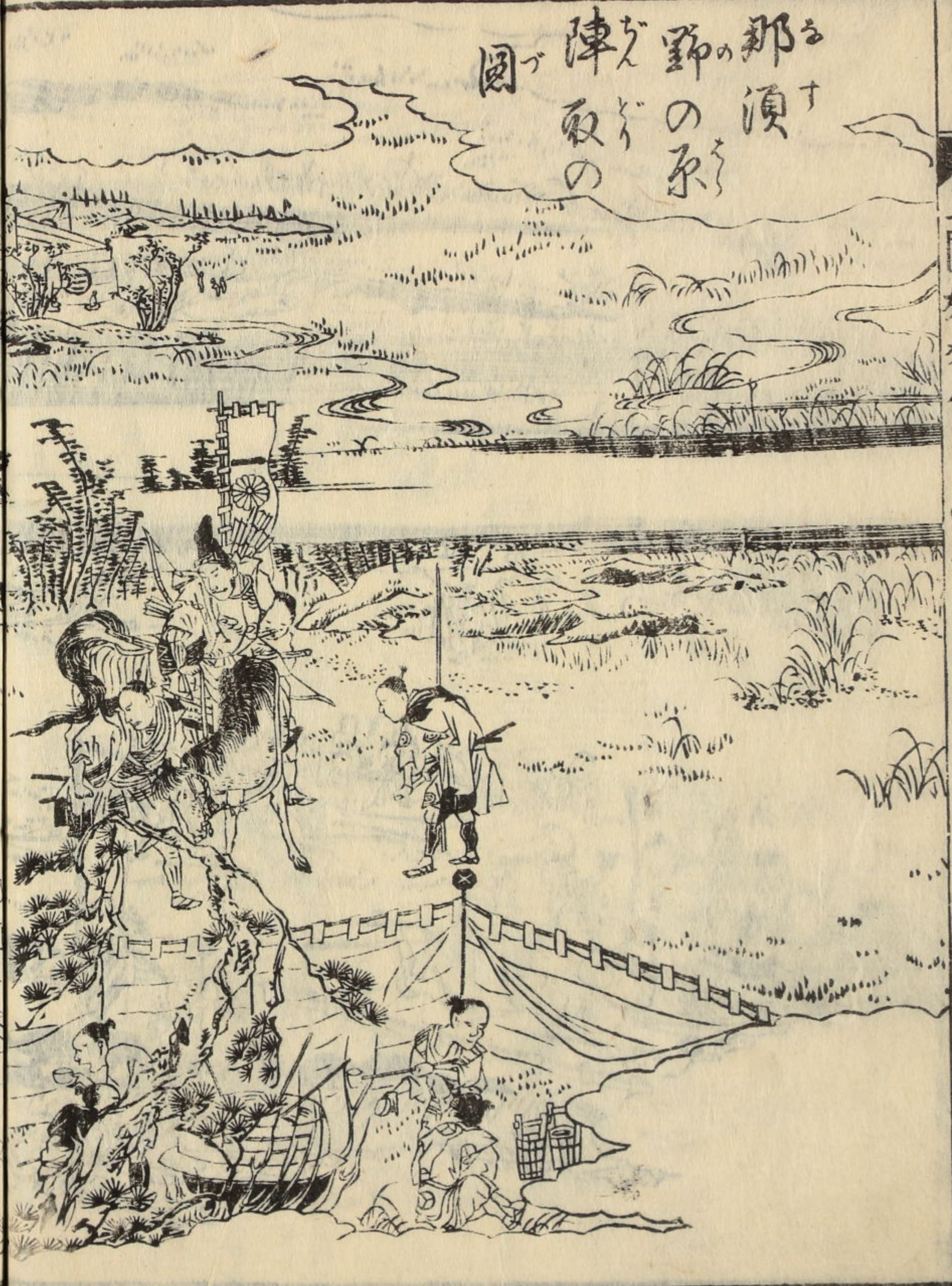


上
下

書本合刊

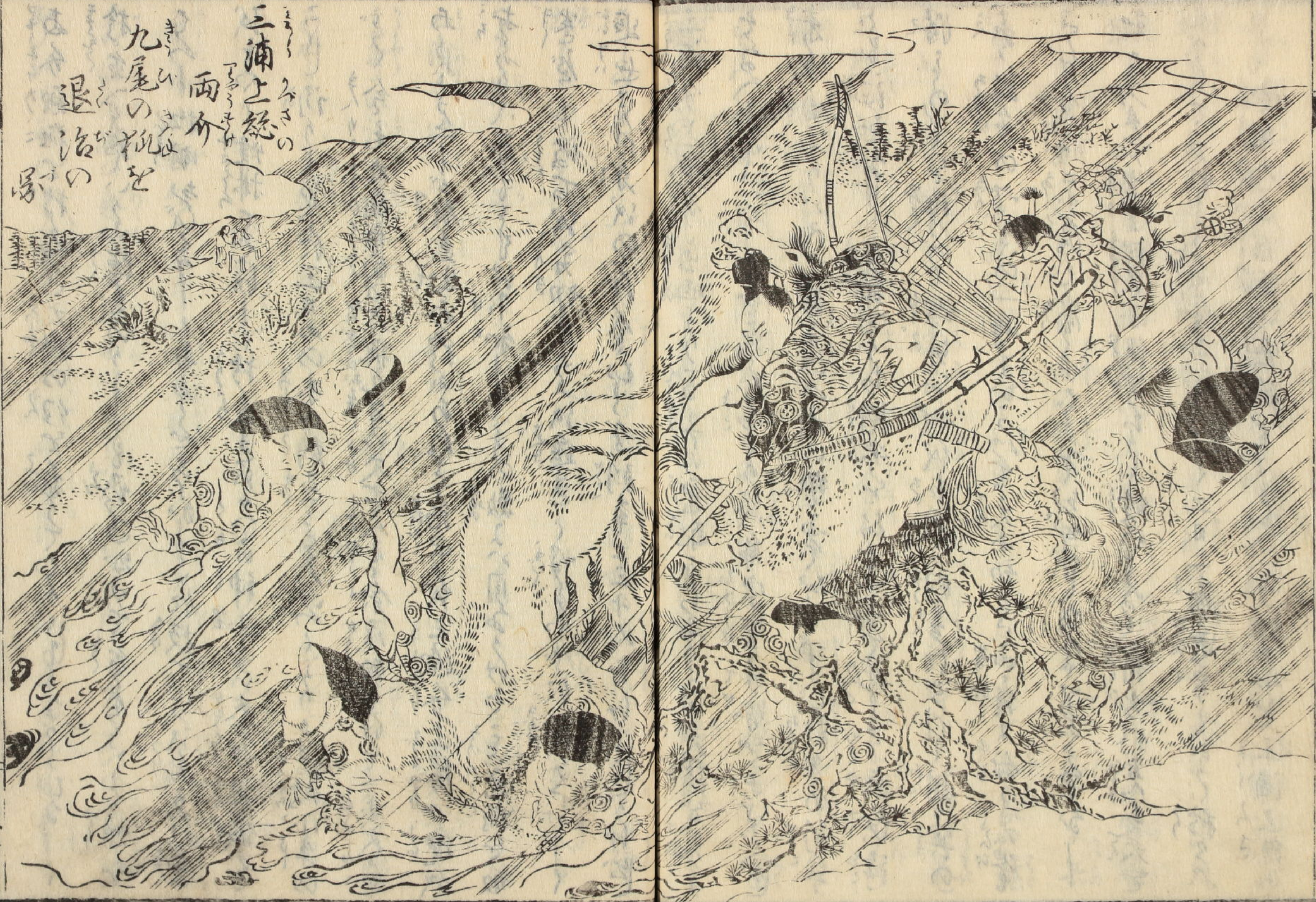


那の陣の取
 須の取
 陣の取



小舟膳苗英の精衣粟毛のるに螺鈿の飾並大星の以膝懸
 切舟の良大の神よりさぶり大身の鎧馬のひく首に引掛け
 扱より三浦上総二宮にさぐる騎士率列卒四ひの物の具
 して花衣にむくより南の飯家二ヶ所はあつて居せし兵
 とくうつて二十又騎士率列卒も三人つてあ家の旗
 波のさすを陣とくく久良神山の安信恭親ひつたの後巻
 小舟の陣羽織は総一宮の御舎人より奉せ山よりて櫃小より
 悪瓶退治系中三里に方を限として花衣御殿一悪難をくんと
 それの御先より降雨さより小舟をもつてさくさくして雷
 眼に志の記れしを引とわさるの法を修りし精場におおてを

三浦分と總分東西よりさるに配ららり二十又騎を先
 とるへ系中に御しをさくむ山より八島宗重も勢をさるが
 来り南よりハ又十騎は六千人の勢ありすむおまの列卒
 とも証をあり右敵をうち割沖をたさくして所く弓矢陰謀
 隊とのくを携つ螺貝を吹吹お圖を同きれさ川と揚が雲の
 勢多の鳴るの一時はさうつて天小初が山をさる御し大地を
 さけ金桶をさるも崩さくさる御しあんとさるさる御し
 船よ入ま六十里に小波ありて焼くくゆる船火れ光を天を
 こがしてこれさる白雲を御し二日二夜透りもさる御し
 とも令色九尾白面の悪瓶をさるさる御し三浦上総の



三浦上総の
西介
九尾の狐を
退治の
家

三國女妖傳下編卷之四

十四

書本合刊

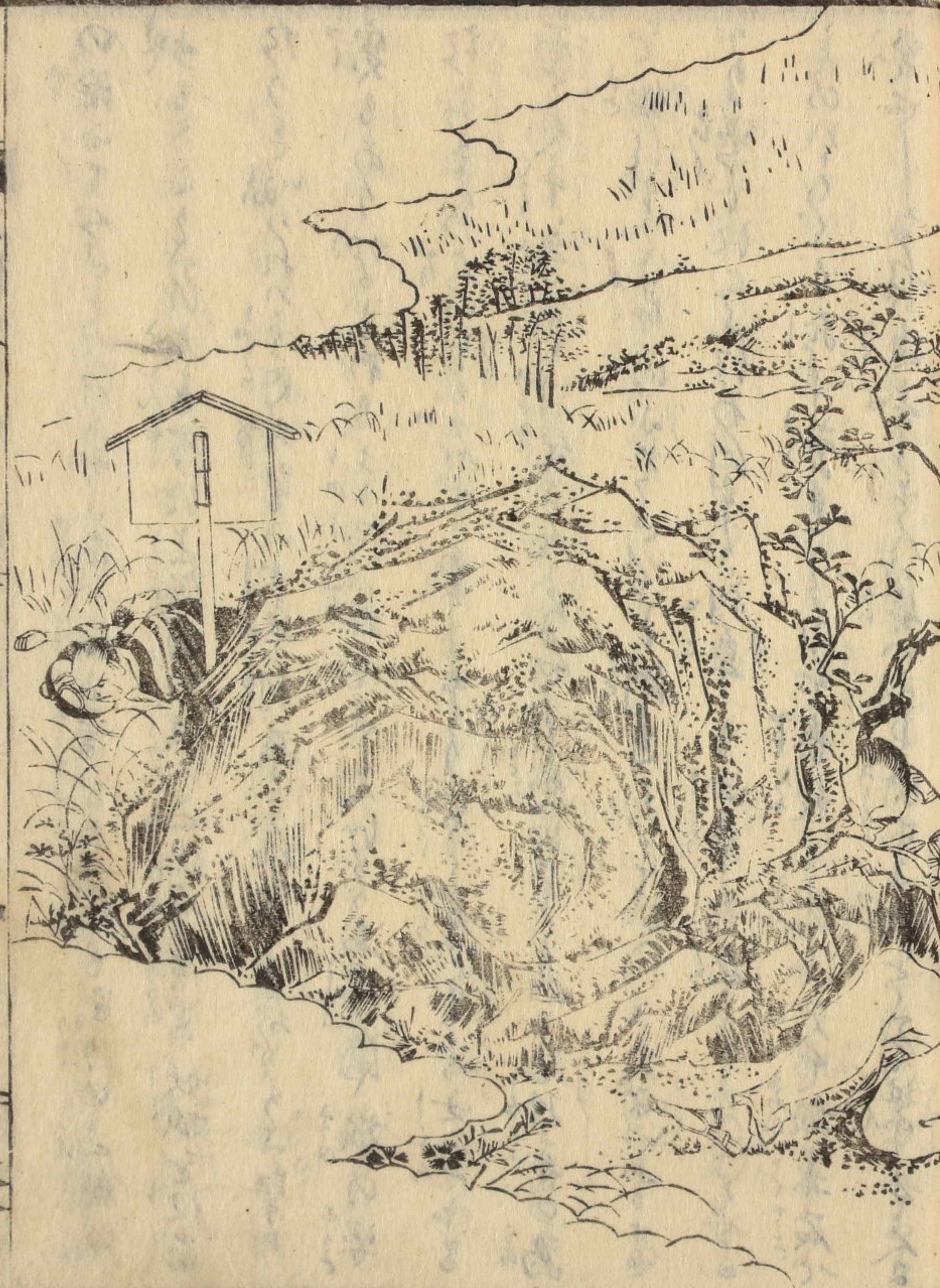
三國女妖傳下編卷之四

十四

書本合刊

其女惡極を討つべき大将の位を慕うてくわくわくおぼろしく
 於て並ぶるやいふ隠意のがらもあらずして怒を
 ちのー松剛おびるやーく打ちをせよかーこれに投てつげ付られ系
 張るやー焼拂ててけーけ立まば久ら神山よの恭親丹波を
 こし祈りーやぶに三日の木の刻さつてころびくうり其初小舟の
 いく令毛九尾白面の大瓶九牙の丈七三尾余尾頭うけて一丈又金
 わんとして下が腰差出あせかあれく飛出り或三浦介上総女魔瓶
 打ちあり八節もとも下に知してよの敷ふ八圓あけせよ惡物を取
 巻登り破石瓶を切さうは遠まてくわくわくおぼろしく
 返せられ身以のがらをむくうり幸三十三人をけしむけけせ

一とさるんとすうふは恭親が修む降雨の法を以て三里城限り
 出るとあつたに取てて一人馬瓶さうしけく或は飛瓶へ又も
 つつと撃一蹴蹴ーこれがおふ害せううものいく人とを敷をまふに
 三浦介は時と飯傍の侍神よりうらむあひーあふあひあふ
 多勢に神力擁護されまふと望まうと引くをどとあふは
 わやまうい惡極の服をうらむと印ーと一ゆりゆりてを討あさる
 くれふもむりまげ討てむめがけてさけうらんとせー知二の美や
 首の妙女討あつてうけ時大音あけて安房國の位人之浦介平
 義絶不測の惡極を討あつてうけ時大音あけて安房國の位人之浦介平
 けしむとあれくむくうり身と縁あつてはの御神よりさあつり大身



悪
毒
石
變
じ
ご
圖

の陰でござつたおぼろけの影に當りあはれども別力の上総
 少もとうとう大善なるに上総國の佳人と徳女廣常妖狐を仕留
 たりと詠りし内大將の士卒列卒これおとかりくさむり
 突もあり切もわりを怪息とさへけりあ思儀や板の罫
 たらまうちたいなる石を敷く下り皆々驚おろし士卒も
 二十人中迄きて引籠さんとのせし知れどもものもお金の為
 を働いしと品時ふたつと倒さるるおのく大よひやう
 ぐり進くはらにありする列卒も士卒もさるるのこころ
 こゝろはくぐく所一帯をさるるを恭親も来りて入て板敷石と
 交りてあはれぬまうまへんが害いおとけしやれをこそ禁めて人
 ありしをさるる其首を八尋小橋に下りて浦上徳のあみ中
 退治の功功立勅命の役目相海らわが勝利の凱歌とさるる
 一トえは場河にまてさるるおとせり進みておとせ
 と恭親の星見に應じ八尋もさるるに引あひり然し一
 掃磨も恭親之浦女義純上総女廣常八尋小橋を治るる
 下新國河うらま日あはれして京はかへ関白殿下つて
 形頂中の悪極退治のありむるはさるるに奉聞終あり
 りはハ威威おとせりおのく恩賞はさるるあり西目紙
 おもひあへる名は後世に著るるありありあうんはく恭親を
 年におろび二度の大功はあはれたる賞として内界殿

の陰でござつたおぼろけの影に當りあはれども別力の上総
 少もとうとう大善なるに上総國の佳人と徳女廣常妖狐を仕留
 たりと詠りし内大將の士卒列卒これおとかりくさむり
 突もあり切もわりを怪息とさへけりあ思儀や板の罫
 たらまうちたいなる石を敷く下り皆々驚おろし士卒も
 二十人中迄きて引籠さんとのせし知れどもものもお金の為
 を働いしと品時ふたつと倒さるるおのく大よひやう
 ぐり進くはらにありする列卒も士卒もさるるのこころ
 こゝろはくぐく所一帯をさるるを恭親も来りて入て板敷石と
 交りてあはれぬまうまへんが害いおとけしやれをこそ禁めて人
 ありしをさるる其首を八尋小橋に下りて浦上徳のあみ中
 退治の功功立勅命の役目相海らわが勝利の凱歌とさるる
 一トえは場河にまてさるるおとせり進みておとせ
 と恭親の星見に應じ八尋もさるるに引あひり然し一
 掃磨も恭親之浦女義純上総女廣常八尋小橋を治るる
 下新國河うらま日あはれして京はかへ関白殿下つて
 形頂中の悪極退治のありむるはさるるに奉聞終あり
 りはハ威威おとせりおのく恩賞はさるるあり西目紙
 おもひあへる名は後世に著るるありありあうんはく恭親を
 年におろび二度の大功はあはれたる賞として内界殿

改申ししきやきれを代くはつてしん新の帝あつては桐ちり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



繪本三國女如傳下編卷之四終

